

話し手と聞き手のカートグラフィー

遠藤喜雄

神田外語大学

【要旨】 本稿では、英語の副詞節の性質を、統語と談話のインターフェイスの観点から考察する。特に、統語と談話のインターフェイスの特質の解明には、1990年中頃からヨーロッパを中心に研究がなされているカートグラフィーの視点が有効であることを示す。具体的には、話し手と聞き手が関わる談話と統語の現象として、Haegeman (2006) による英語の副詞節の分析を、日本語学における研究成果を取り入れて、カートグラフィーの観点から洗練することを試みる。さらに、副詞節に見られる局所性の効果を付加疑問文に焦点を当てて議論する*。

キーワード: カートグラフィー, 統語, 談話, インターフェイス, 副詞節

1. はじめに

本稿では、英語の副詞節の性質を、統語と談話のインターフェイスの観点から考察する。特に、統語と談話のインターフェイスの性質の解明には、1990年中頃からヨーロッパを中心に研究がなされているカートグラフィーの視点が有効であることを示す。

本稿は、次のように構成されている。まず、第2節で、統語と談話に関わる研究の歴史的背景を、カートグラフィーの基本的な考えを紹介しながら俯瞰する。次に、第3節で、話し手と聞き手が関わる談話と統語の現象として、Haegeman (2006)

* 本稿の一部は、2008年10月に神田外語大学で開催された井上ゼミ、2008年11月に筑波大学で開催された日本英語学会のシンポジウム、2008年12月に津田塾大学で開催された言語文化研究所プロジェクト第44回研究会、2009年3月にジュネーブ大学における Research Seminar、2009年5月に東京大学(駒場キャンパス)で開催された日本英文学会第81会大会(全国大会)における招待研究発表および2009年6月に神田外語大で開催された日本言語学会の公開シンポジウムで発表された。これらの集りに参加して下さった方々、とりわけ以下の方々からは、貴重なコメントをいただいた(敬称略):井上和子、野田尚史、長谷川信子、高橋将一、岸本秀樹、竹沢幸一、池内正幸、千葉修司、野村忠央、神谷昇、内堀朝子、上田由紀子。また、Luigi Rizzi, Liliane Haegeman, Guglielmo Cinqueからは、議論を通して、多くの実りの多い助言をいただいた。これらの方々に、心より感謝の意を表したい。これに加えて、構成や内容について、さまざまな指摘を下さった査読者の方に厚くお礼を申し上げます。尚、本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『談話のカートグラフィー研究:主文現象と複文現象の統合を目指して』(研究代表者:遠藤喜雄)および日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(B)『文の語用的機能と統語論:日本語の主文現象からの提言』(研究代表者:長谷川信子)の補助を得てなされている。最後に、本稿における不備は全て筆者に帰するものである。

による英語の副詞節の分析を見る。第4節では、日本語学における研究成果を取り入れて、Haegemanの分析をカートグラフィーの観点から洗練することを試みる。第5節では、副詞節に見られる局所性の効果を付加疑問文に焦点を当てて議論する。第6節では、全体をまとめ、いくつかの関連する問題を取り上げる。

2. 背景

日英語の談話と統語に関わる研究の歴史において、最も詳細でオリジナルな研究として、久野(1987)を挙げることが出来る。そこでは、「視点」「トピック」「フォーカス」といった談話に関わる日英語の文法現象が初めて体系的に論じられた。その後も、Kuno and Takamiの一連の研究(例えば、Kuno and Takami(1993))で談話と統語に関わる研究は、日英語で深く掘り下げられたが、そこには、そもそも談話と統語がどのように繋がっているのか、という根本的な問いが欠落していた。その理由としては、談話と統語が独立して研究されて来たことや、当時の統語研究が談話の情報を組み込めるほど十分に進んでいなかったという事実を挙げることができる。しかし、この統語と談話の垣根を取り払う歴史的な変革が、カートグラフィー研究によってもたらされた。カートグラフィーとは、the cartography of syntactic structuresの略で、1990年代半ばに、Luigi RizziとGuglielmo Cinqueが共同で開始した、生成文法の枠組みの中にある研究プロジェクトである。その趣旨は、普遍的な統語構造を地図のような形で出来るだけ綿密で詳細に提示しようというところにある。特に、談話に関しては、Rizzi(1997,2004)により、トピックやフォーカスといった談話情報が統語構造と繋がるメカニズムが解明された。そのメカニズムの概要は、統語構造の中で命題を表す統語領域から談話を表す統語領域に移動が生じた場合、連鎖(chain)が形成され、その連鎖を通して命題の要素に談話の情報が付与される、という趣旨である。以下、この点を詳しく見よう。

まず、カートグラフィーでは、文の構造を(1)に見る3つの領域からなると考える。

- (1) peripheral field : 話し手や聞き手の情報を含めた「談話/スコープ」が関わる領域。
 inflectional field : 一致、屈折等の文法範疇が関わる領域。
 lexical field : 主題役割/意味役割が関わる「語彙範疇」の領域。

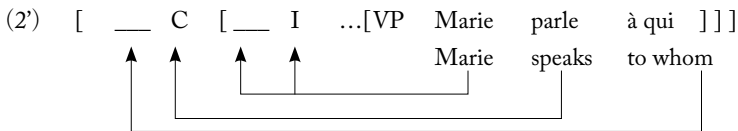
まず、文の左端(left periphery)の領域である peripheral field は、話し手や聞き手の情報を含めたトピック、フォーカス等の談話情報の性質を表す領域で、統語的に高い領域である。(この領域については、Rizzi(2004), Endo(2006,2007) 遠藤(2009a)を参照。)次に、文の中央の領域である inflectional field は、従来の文法でカバーされていた領域で、副詞や屈折等の機能範疇が関わる領域である。(この領域については、Cinque(1999), 金子・遠藤(2001)を参照。)最後に、文の右端の領域である lexical field は、語彙範疇が関わる領域で、動作主や着点等の主題役割/意味役割が表示される統語的に低い領域である。(この領域については、Rizzi(2009), 藤田・

松本 (2005) を参照。)

次に、これらの領域の間に成り立つ関係を見ると、lexical field は、peripheral field や inflectional field と移動により形成される連鎖によって関連付けられる。具体例として、次のフランス語の文を見よう (cf. Rizzi 2009)。

- (2) A qui parle Marie?
 To whom speaks Marie'
 'To whom does Marie speak?'

この文においては、次の統語表示に見るように、述語と項が全て、基底の動詞句 Mary speaks to whom から移動している。まず、主語は、屈折 (Inflection: I) の関わる inflectional field に移動し、格を付与された後で、主語の統語位置 (以下、ポジション) へ移動することで、後続する要素とアバウトネス (aboutness) の関係を持つ。次に、動詞も、同じ屈折の関与する領域に移動した後、文頭の peripheral field (従来の Complementizer: C) の領域に移動し、疑問の意味解釈が付与される。最後に、目的語の wh 要素は、同じ peripheral field に移動し、そこで疑問のスコープがマークされる。これら一連の移動操作の結果、(2) のフランス語の文は、SVO という基本語順とは全く逆の OVS という語順を持つ。



ここで重要なのは、これらの一連の移動により、wh 要素が、基底と移動先のポジションの間で連鎖を形成し、その連鎖に意味役割とスコープ／談話の意味解釈が付与されているという点である。つまり、移動により、文の要素には、2つの意味解釈が付与される。一つは、基底のポジションで付与される項構造／意味役割で、Chomsky (1995) や Hale and Keyser (2002) で示されたように、これらの意味は構造的に表示される。例えば、動詞の目的語が典型的に持つ受動者 (patient) という意味役割は、動詞と局所的な関係にある VP 内のポジションで付与され、動詞の主語に典型的に付与される動作主 (Agent) という意味役割は、それよりも高いポジションで付与される。Rizzi (2009) は、この意味役割を統語的に表現するアプローチを、文頭に生じる peripheral field に適用した。つまり、この peripheral field では、階層構造をなす一連の機能範疇があり、そこでトピック／フォーカスといった談話に関わる意味が付与される。このように意味役割や談話／スコープに関わる意味を構造的に表現する (syntacticize) というアプローチより、統語と意味／談話がストレートに繋がるのが可能となる。(この点については、Rizzi (2009), 遠藤 (2009b) を参照。)

より具体的には、文の左端に生じる peripheral field で付与される談話／スコープ

に関わる機能範疇として、以下のものがある (Rizzi 1997, 2004, 2009)。

(3) 談話の領域 (peripheral field)

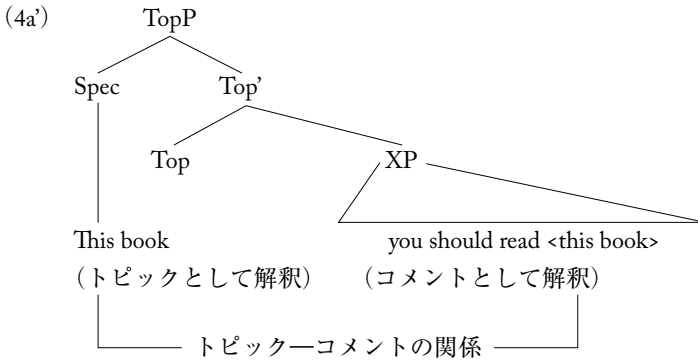
Force	Top	Int	Foc	Mod ...	Q	Fin
文のタイプ	主題	何故	焦点	前置された副詞類	疑問詞	定形／非定形

この談話に関わる様々な機能範疇のポジションは、階層構造を持ち、イタリア語やフランス語といったロマンス系の言語では、上に見る線形順序で配列されている。これらの機能範疇の内容を見ると、左端の一番高い階層にある Force は、発話の力 (illocutionary force) を意味し、肯定 (英語では, that), 疑問, 命令といった文のタイプや発話の力を表す要素が占めるポジションである。そして、その下の階層にある Top は、文中において主題と解釈される要素が占めるポジションである (Top は Topic の略である)。そして、その下の階層には、英語でいえば why に相当する要素が生じるポジションである (Int は Interrogative の略である)。その下の階層には、焦点要素が生じるポジション Foc がある (Foc は Focus の略である)。さらにその下の階層には、際立ちの意味を付与するために前置された副詞的要素が占めるポジション Mod がある (Mod は Modifier の略である)。さらにその下には、why 以外の wh 疑問要素が生じるポジション Q がある (Q は Question の略である)。最後に、一番下の階層には、文の定形／非定形を表す要素が生じるポジション Fin がある (Fin は, Finite の略である)。言語により、このポジションの配列順序は、部分的に異なることがあるが、基本的な各ポジションの配列は概ね固定しており、普遍的な性質を持つ (cf. Rizzi 2004, Endo 2007)。

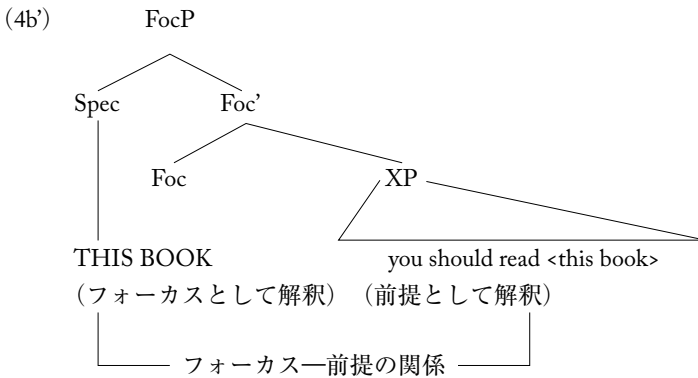
これらの機能範疇の主要部は、lexical field や inflectional field から談話やスコープの意味が付与される要素を探索 (criterial probe) し、その指定部のポジションに牽引する。そして、そのポジションで、音や談話／スコープに関わる情報が付与される。具体例を見よう。

- (4) a. This book, you should read ____.
 b. THIS BOOK, you should read ____.
 c. Which book do you think I should read ____?

文 (4a) においては、this book が、下線で示された基底のポジションで述語 read の項の意味役割を付与され、文頭の peripheral field でトピックの意味が付与されている。ここで文頭の this book がトピックの意味が付与されるのは、peripheral field において、下の (4a') の統語表示に見るように、this book が、Top の指定部のポジションを占めるためである。つまり、Top という主要部が、「指定部の要素をトピックとして解釈し、補部をコメント (comment) として解釈せよ」という指令を与えた結果、this book がトピックとして解釈され、それに後続する補部の要素がコメントと解釈される。ここで付与されるトピックの解釈とは、概略、談話において話し手や聞き手に馴染みがある (familiar) 要素という意味である (cf. Rizzi 1997, 2009)。



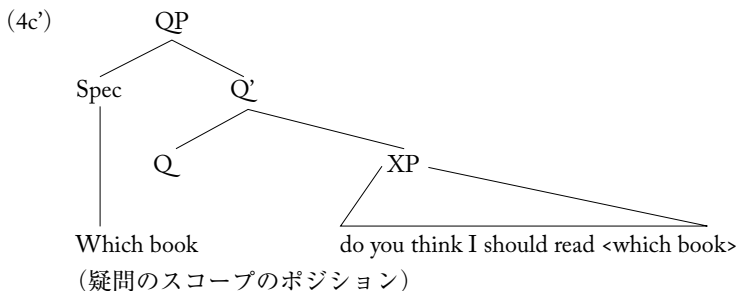
一方、文 (4b) においては、THIS BOOK が、基底のポジションで述語 read の項の意味役割を付与され、文頭の peripheral field でフォーカスとして解釈されている。これは、下の (4b') の統語表示に見るように、Foc の指定部に THIS BOOK が牽引されるためである。つまり、この Foc という主要部が指定部に牽引した要素に対して、「指定部の要素をフォーカスとして解釈し、補部を前提 (presupposition) として解釈せよ」という指令を行った結果、指定部にある THIS BOOK にフォーカスの意味が付与され、それに後続する補部の要素が前提と解釈される。ちなみに、フォーカスの意味には、基本的には新情報 (new information) が含まれ、対照 (contrast) と強調 (emphasis) の 2 種類に下位区分される。前者では、文中のフォーカス要素が、聞き手の想定する以外のものであることを話し手が想定している (例えば、(4b) では、話し手は、聞き手が this book 以外のものを読むことを談話の中から想定している)。一方、後者では、そのような想定はなく、文中の要素を単に強調しているという話し手の意図を表す (cf. Kiss 1998)。



これらの機能範疇は、恣意的に設定されている訳ではなく、概念的な必要性があったり、世界中の言語において、主要部が実際に音声化 (spell-out) される事例がある場合に想定される。例えば、Gunbe という言語においては、トピックとフォー

カスの主要部が両方も形態素により音声化される (Aboh 2004)。

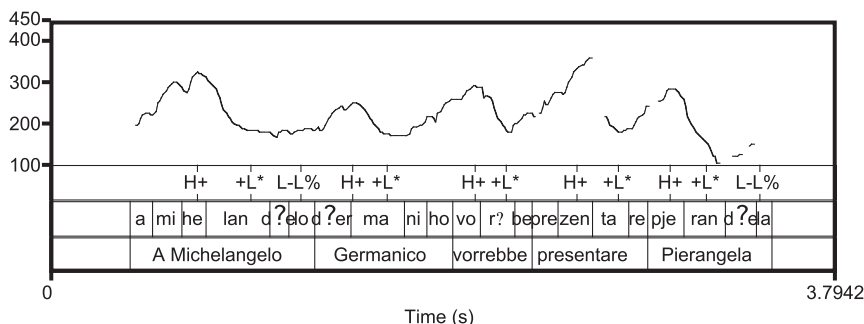
さらに peripheral field でマークされる別の種類の情報として、スコープがある。例えば、(4c) では、wh 要素である疑問の演算子 which book が、主文にある疑問に関わるポジション Q の指定部に移動され、for which x, x a book, [you think I should read x という表示が付与され、which book のスコープが補文ではなく主文にあることが示されてされている。



この peripheral field は、従来の生成文法において、CP と呼ばれてきた領域で、そこで付与される情報がスコープと談話に関わる情報であるため、談話／スコープの特質 (discourse-scope properties) と表されることがある (cf. Chomsky 1995)。

次に、これら談話に関わる機能範疇が音のインターフェイスに対して与える指令を見よう。次に見る Bocci (2009) による音声実験の表示からも明らかのように、トピックの主要部は、トピック要素を高いピッチで発音する指令をしている。

- (5) A Michelangelo (Top), Germanico vorrebbe presentare Pierangela
 'To Michelangelo (Top), Germanico would want to introduce Pierangela'



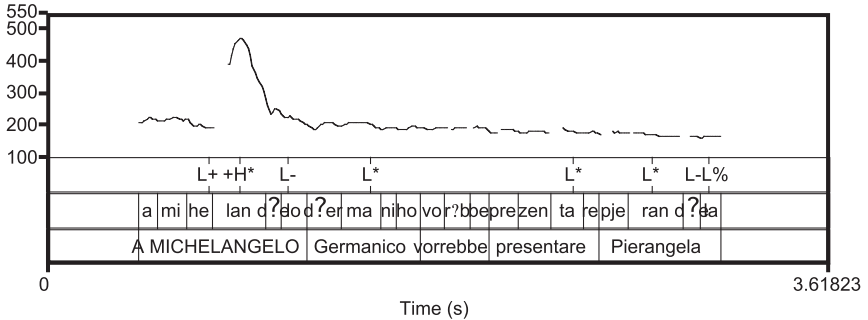
ここでは、文頭に生じる A Michelangelo というトピック要素が高いピッチの波形を持ち、それに後続する Germanico 以下の要素が、通例の平板でないピッチを持つことが表されている。一方、フォーカスの主要部は、異なる指令を音のインターフェイスにおいて与える。その指令とは、フォーカス要素をトピック要素よりも高いピッチで発音し、後続する前提部分を平板なピッチで発音せよ、という趣旨の指令であ

る。具体例を見よう。

(5) Pitch contour of Focus – Presupposition (from Bocci 2009)

A MICHELANGELO (Foc) Germanico vorrebbe presentare Pierangela

‘TO MICHELANGELO (Foc) Germanico would want to introduce Pierangela’



ここでは、文頭のフォーカス要素 A MICHELANGELO が、上で見たトピック要素よりも高いピッチの波形を持ち、残りの Germanico から文末までが平板なピッチの波形を持つことが示されている。

以上、本稿で想定されるカートグラフィーの基本的な考えを概観した。以下では、これらの考えを念頭において、英語の副詞節を、日本語学の研究から得られた知見を取り入れながら考察する。具体的には、Haegeman (2006) の副詞節の分析をカートグラフィーの観点から洗練することを試みる。

3. 副詞節

Haegeman (2006) によると、英語の副詞節は、中核的な副詞節 (central adverbial clause) と周辺的な副詞節 (peripheral adverbial clause) に2分される。この2つのタイプの副詞節は、次の特徴を持つ。

(6) 中核的な副詞節：主節の表す事象を修飾／限定する；主節と共に一つの発話の力を持つ。

周辺的な副詞節：主節の背景を表す；主節と独立した発話の力を持つ。

具体例を見よう。まず、(7a) に見る中核的な副詞節では、その副詞節の表す事象 (event) が主節に組み込まれ (integrated) ており、文全体で一つの発話の力 (illocutionary force) が存在する。一方、(7b) に見る周辺的な副詞節では、聞き手に対して話のバックグラウンドや発言の証拠 (evidential) を提示する、主節とは独立した発話の力が存在する。

(7) a. If your back-supporting muscles tire, you will be at increased risk of lower-back pain. (*Independent on Sunday, Sports*, 14.10.1, page 29, col 3)

- b. If we are so short of teachers ('Jobs crisis grows as new term looms', August 30), why don't we send our children to Germany to be educated? (Letters to the editor, Eddie Catlin, Norwich, *Guardian*, 31.8.1, page 9, col 5)

次に、これら2種類の副詞節の内部に生じる要素の分布を見よう。まず、中核的な副詞節には、(8a-b)に見るように、*may*など話し手のムードを表す助動詞や、*probably*等の話し手の評価や認識を表す副詞が生じない。一方、周辺的な副詞節には、(8c-d)に見るように、これらの要素が生じることが可能である。

- (8) a. *Mary accepted the invitation without hesitation after John may have accepted it.
 b. ??John works best while his children are probably/might be asleep.
 c. The ferry will be fairly cheap, while/whereas the plane may/will probably be too expensive.
 d. If Le Pen will probably win, Jospin must be disappointed.

第2に、中核的な副詞節は、いわゆる主文現象 (root phenomena) を示さずに、話し手が聞き手に対して確認をする付加疑問の要素が生じない。例えば、(9a)に見るように文末に生じる付加疑問文は、中核的な副詞節の要素と呼応することが不可能であり、主文の要素と呼応する。一方、(9b)に見るように、文末に生じる付加疑問文は、周辺的な副詞節内の要素と呼応することが可能である。(ちなみに、(9c)に見るように、文末に生じる付加疑問文は、周辺的な副詞節を超えて主節の要素と呼応することは出来ない。この点については、次の節で議論する。)

- (9) a. Bill took a degree at Oxford while his children were still very young, *weren't they/didn't he?
 b. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, isn't she?
 c. *Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, didn't he?

第3に、周辺的な副詞節には、話し手が聞き手に対して行なう発話行為 (speech act) を表す副詞 *frankly* 等が生じることが可能である。例えば、(10a)においては、命題内容に対して話し手がとる心的態度が *frankly* という副詞によって表わされている。一方、中核的な副詞節においては、(10b)に見るように、この種の副詞が生じることはない。

- (10) a. [A referendum on a united Ireland]...will be a 'good thing, because frankly they need to be taken down a peg and come down to earth and be a little bit more sober in their approach to things.' (*Guardian*, 22.7.2, page 4, col 4)
 b. *I didn't drop the class because frankly I didn't like it, I dropped it because it was too expensive.

以上の Haegeman の考えは、次のようにまとめることができる¹。

- (11) 認識の法要素, 付加疑問要素, 発話行為の副詞は,
 英語の中核的な副詞節の内部には, 生じることが不可能。
 英語の周辺的な副詞節の内部には, 生じることが可能。

Haegeman (2006: 36) は、この違いを次のように説明する。まず、Haegeman は、Rizzi (1997) に従い、*peripheral field* が階層構造を持つと想定する。そして、周辺的な副詞節と中核的な副詞節は、次に見るように、*peripheral field* に生じる要素が異なるとする。

- (12) 周辺的な副詞節 : Sub Top Focus Force Mod* Fin
 中核的な副詞節 : Sub Mod* Fin

ここで、Sub とは *while* 等の接続表現の主要部となる機能範疇で、周辺的な副詞節は、その下の階層に、発話行為の関わる *Force* という機能範疇の主要部を持つ。Haegeman は、この *Force* が、話し手の認識のムード要素、付加疑問要素、発話行為の要素などを認可する (*license*) と主張している。周辺的な副詞節には、これらの要素の認可詞 (*licensor*) である *Force* が存在するため、話し手の認識のムード等の要素が生じることが可能となる。一方、中核的な副詞節は、これらの要素の認可詞である *Force* を持たない。その結果、中核的な副詞節には、認識のムード要素、付加疑

¹ Coniglio (2009) は、ドイツ語の中核的な副詞節と周辺的な副詞節の違いを考察している。例えば、中核的な副詞節は、主文の否定のスコープに入ることが可能であるが、周辺的な副詞節は、主文とは切り離されて解釈されるため、主文の否定のスコープに入ることが不可能である。そして、(i) に見る否定のスコープに入る中核的な副詞節の内部には、聞き手を巻き込む対人的なムードの要素 *ja* や *doch* が生じることが不可能であるが、(ii) に見る否定のスコープに入らない周辺的な副詞節には、そのような対人的なムード要素が生じることが可能である。(*doch* は、命令形で「ぜひ」「たのむから」くらいの意味を持ち、平叙文で、確認、驚き、非難を表す要素で、典型的には主文に生じる要素である。)

- (i) Er ist nicht durchgekommen, weil er (*ja*) schlechte Noten bekommen hatte.
 'He had to repeat the year [lit. 'he did not pass the grade'], because his grades were too bad.'
 (ii) Er ist nicht durchgekommen, weil er (**ja*) gute Noten bekommen hatte (... sondern deshalb, weil er Mitleid bei den Lehrern erregt hat).
 'It was not because he had good grades that he did not have to repeat the year, but because the teachers pitied him.'

日本語でも、次節で見る終助詞「よ」等の対人的なムード表現が副詞節の後ろに生じると、以下に見るように、その副詞節は、周辺的な副詞節に見られる独立した発話の力を持つ解釈が顕著となり、主文の否定のスコープに入ることが難しくなるように思われる。

- (iii) a. 太郎は[花子を憎んでいたから]批判したのではないです。
 (副詞節が主文の否定のスコープの中の解釈)
 b. *太郎は[花子を憎んでいたからね]批判したのではないです。
 (副詞節が主文の否定のスコープの中の解釈)
 c. 太郎は[花子を憎んでいたからね]褒めなかったのです。
 (副詞節が主文の否定のスコープの外の解釈)

問要素、発話行為の副詞などが生じることが不可能となる。

以上が、英語の2種類の副詞節の違いに関する Haegeman の説明である。Haegeman の主たる関心は、中核的な副詞節と周辺的な副詞節に関わる諸現象と Force との関連性を示すところであり、そこでは中核的な副詞節や周辺的な副詞節に関する構造やメカニズムについて、これ以上の議論はなされていない。本稿の主たる関心は、カートグラフィーの視点から、Haegeman (2006) では議論されていない2種類の副詞節の性質に考察を加えることにより、これら2種類の副詞節の分析やメカニズムを洗練するところにある。より具体的には、本稿では次の点を論じながら、副詞節の構造を洗練することを目指す。

- (13) a. 周辺的な副詞節が文頭に生じる場合、「話し手」の認識が関わるムード要素は生じることが可能であるが、「聞き手」が関わる付加疑問文や発話行為の副詞が生じることが不可能である。一方、文末の周辺的な副詞節においては、それらの両方の要素が生じることが可能である。この非対称性は、なぜ生じるのか？
- b. 文末の付加疑問文は、周辺的な副詞節を超えて主節の要素と呼応しないが、中核的な副詞節を超えて主節の要素と呼応することは可能である。この非対称性は、なぜ生じるのか？

まず、(13a) の問題を見よう。例えば、次に見る文頭に生じる周辺的な副詞節においては、話し手のムードを表す副詞 *probably* や助動詞は生じるが、話し手が聞き手に対して行う発話行為の副詞 *frankly* 等は生じない (cf. Verstraete 2002, 2007)。しかし、文末に生じる周辺的な副詞節においては、これら2種類のムード要素が生じることが可能である (cf. (8c), (10a))。

- (14) Whereas Thompson still receives a substantial income from commercial interests, Krugar has to go out to work for a living to support his wife and one-year-old daughter. (CB today).

これら2種類の副詞が同じ Force により認可されるとする Haegeman の考えでは、この違いをストレートに表現することは難しい。本稿では、Haegeman の周辺的な副詞節をカートグラフィーの観点から洗練して、2種類に分化することにより、(13a) の問に対する答えを示唆する。

次に、(13b) の問題を見よう。この問題は、先に見た付加疑問文の分布に関わるものである。例えば、以下に再録した文 (9a) において、文末の付加疑問文は、中核的な副詞節の前に生じる主節の要素と呼応している。一方、(9b-c) に見るように、文末に生じる付加疑問文は、周辺的な副詞節の前に生じる主文の要素と呼応しない。この点については、Haegeman は説明を試みていない。本論では、この現象に対し、カートグラフィーの点から、局所性 (locality) の原理を用いて説明を試みる。

- (9) a. Bill took a degree at Oxford while his children were still very young, *weren't they/didn't he?
 b. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, isn't she?
 c. *Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, didn't he?

本稿の主たるアイディアは、以上の問題を解決するためには、日本語学における文の従属度の研究が重要な示唆を提供してくれるという点にある。そこで、まず関連する日本学の研究を見よう。

4. 日本語学からの知見

本節では、日本語学の研究により明らかにされた文の従属度の視点から、英語の周縁的な副詞節が、実は2種類に分化していることを示唆する。まず、基本となる日本語の文の統語構造を、機能範疇に焦点を当てて考察しよう(例文は、野田(1989)から借用)。

- (15) a. 並べ+られ+てい+なかつ+た+そう+です+よ
 b. 述語<ボイス<アスペクト<否定<テンス<対事的モード(話し手が関わるモード)<丁寧<対人的モード(聞き手が関わるモード)

文(15a)では、述語「並べ」にボイス要素「られ」が後続し、次にアスペクト要素「てい」が後続する、という線形順序が見られる。Baker(1985)の鏡像原理(mirror principle)によれば、動詞から右に離れていけばいくほど、その要素は、動詞よりも高い階層に属することになり、日本語が、(15b)に見る機能範疇の階層構造を持つことになる。

さて、南(1974)によれば、日本語の文には4種類の従属度があり、(15b)の一番低い階層の要素から見ていき、どのタイプの階層の要素までを含めることが可能か、という基準により、文は従属度に関して4つのタイプに分類される。その4つのタイプの従属度とは、次に見るA類からD類である。

- (16) A類:「を」格, ボイス成分
 B類: A類に含まれる要素, 「が」格, アスペクト, 肯否定, 丁寧表現, テンス
 C類: A類, B類に含まれる要素, 主題, 対事的モダリティ
 D類: A類, B類, C類に含まれる要素, 対人的モダリティ

具体例を見よう。

- (17) a. アメを舐めながら (A類)
 b. 太郎が来ていた時 (B類)
 c. 太郎は花子に批判されたようだが (C類)
 d. そうだな、荷物は 多分 きのう横浜に着いただろうよ/逃げろ。(D類)

A類の従属節には、(17a)に見るように「を」という一番低い階層に属するボイス要素が生じることが可能であるが、「アメを舐めていながら、私は走った。」のように、その上の階層に属するアスペクト要素「ている」が生じることが不可能である。次に、B類の従属節には、(17b)に見るように、このアスペクト成分は生じることが可能であるが、「太郎が来たようだ時、私は家にいました。」のように、その上の階層に属する話し手のムードを表す対事的モダリティ成分「ようだ」が生じることが不可能である。さらにC類の従属節には、(17c)に見るように、この話し手が関わる対事的モダリティの要素が生じることが可能であるが、「太郎は花子に批判されていないようだねが、私は何もませんでした。」のように、その上の階層に属する話し手が聞き手に確認をするという対人的 (interpersonal) モダリティの要素「ね」は、生じることが不可能である。最後にD類だが、南 (1974:134) は、この類の従属度を持つ文に生じる要素として、(17d)に見る「着いたらうよ」の対人関係を表す終助詞や「逃げろ」に見る命令の助詞に着目する。南自身は、このD類に属する接続要素の具体例を挙げていないのだが、「～と」などの接続要素が想定されることが多い (cf. 庵 2001)。

さて、本稿で重要なのは、C類とD類に見る従属度の分化である。この分化により、「話し手」のムードを表す「ようだ」のような表現が生じることが、C類とD類の節には可能である一方、話し手が聞き手に確認を促す「対人」に関わる「ね」等の要素が、D類の節にのみ生じることが可能となる。

上で見たように、Haegeman は、「話し手」の認識を表すムード要素と話し手が「聞き手」に確認をする付加疑問文を同等に扱い、共に英語の周辺的な副詞節に生じることが可能とした。しかし、前節で見たように、文頭に生じる周辺的な副詞節には、「話し手」のムードを表す要素は生じるが、「聞き手」が関与する対人の要素は生じない、という非対称性が存在する。この非対称性は、英語でも、「話し手」のみが関与するC類と「聞き手」が関与するD類の従属度の分化が存在することを示唆している。つまり、英語の周辺的な副詞節は、文頭に生じる場合にはC類の従属度を持ち、文末に生じる場合にはD類の従属度を持つという可能性が示唆される。以下、この可能性を考察する。

まず、事実を整理しよう。Liliane Haegeman (私信) の指摘するように、英語の周辺的な副詞節は、主節の前と後ろの2つのポジションに生じることが可能である。

(18) …周辺的な副詞節…主節…周辺的な副詞節…

そして、どちらの環境においても、副詞節の内部には、話し手のムードを表す要素が生じることが可能である。しかし、文末に生じる周辺的な副詞節においてのみ、聞き手を巻き込む対人的なムード表現が生じることが可能である。

(19) …周辺的な副詞節…主節…周辺的な副詞節…

(*聞き手のムード表現) (聞き手のムード表現)

具体例として、前節で提示された次の例を見よう。

- (20) Whereas Thompson still receives a substantial income from commercial interests, Krugar has to go out to work for a living to support his wife and one-year-old daughter. (CB today).

インフォーマントによれば、この文の文頭に生じる周辺の副詞節には、「話し手」のムードを表す対事的モダリティーの副詞 *probably* は生じることが可能であるが、話し手と「聞き手」の両方が関与する対人的なムードの発話行為の副詞 *frankly* は生じることが難しい。つまり、同じ周辺の副詞節であっても、文頭と文末という異なるポジションにより、話し手のムード要素と聞き手のムード要素に対して異なる認可がなされていることが示唆される。より具体的には、文末に生じる周辺の副詞節は、主文への従属度が低く、D類の従属度を持つように思われる。このD類の従属度を持つ文は、聞き手を巻き込む対人に関わる表現が生じる場所にその特徴がある。次にその事例を見よう。

Haegeman (私信) が指摘するように、文末に生じる周辺の副詞節内には、付加疑問文や命令文が生じることが可能であるが、文頭に生じる周辺の副詞節においては、付加疑問文や命令文という断定以外の発話行為を表す要素が生じることは不可能である (cf. Verstraete 2002, 2007)。この付加疑問文や命令文は、話し手が聞き手に働きかける対人的な要素であり、周辺の副詞節が文頭に生じるか文末に生じるかによって、聞き手を巻き込む「対人的」な要素が生じる可能性が異なるのである。

- (21) …周辺の副詞節…主節…周辺の副詞節…
(*付加疑問 / *命令文) (付加疑問 / 命令文)

文末の周辺の副詞節に生じる命令文の具体例としては、次に見る事例がある。

- (22) a. The students should have enough money, although remember we are expecting a drop in the department funding.
b. The fees should bring in more money, because remember we are expecting a drop in the department funding. (Verstraete 2002: 146)

周辺の副詞節に生じる疑問要素としては、*wh* 疑問文や修辭疑問文がある。これらの要素も聞き手を必要とするのであるが、次に見るように、文末に生じる周辺の副詞節においては、これらの要素が生じることが可能であるが、文頭に生じる周辺の副詞節においては、生じることは不可能である。

- (23) a. Johnny Depp was very good, although why did he have to have an Irish accent?
b. *Although why did he have to have an Irish accent, Johnny Depp was very good. (Verstraete 2007: 165)

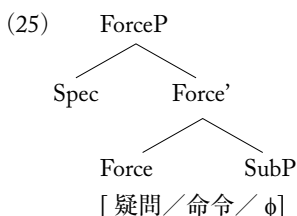
- c. We should go on a picnic, because isn't it a beautiful day!
 d. *Because isn't it a beautiful day!, we should go on a picnic. (Lakoff 1987: 474)

これらの事実から、次の点が示唆される。Haegeman は、「話し手」が関わる対事的な要素と「話し手と聞き手」の両方が関わる対人的な要素が同じ Force により認可されるとしているが、この2つは区別する必要がある。つまり、文頭に生じる周辺的な副詞節には、話し手の認識に関わる対事的な要素は生じるが、聞き手が関与する対人的な要素は生じないという非対称性がある。この非対称性を捉えるために、話し手と聞き手の要素に関わる要素の認可方法を2つに分ける必要があることが示唆されるのである。実際、話し手の認識に関わる対事的な要素と聞き手が関与する対人的な要素の区別が副詞節の分類において必要であることは、Verstraete (2007: 133-134) により、すでに示唆がなされている。例えば、whereas に導かれる副詞節は、他の周辺的な副詞節とは異なり、文末に生じて、話し手のムード表現は認可する可能であるが、話し手と聞き手の両方が関与する対人的な要素は認可できない。そのため、次に見る文末に生じる whereas に導かれる周辺的な副詞節には、may という話し手のムード表現は生じているが、ここに聞き手に関わる対人的な副詞等は生じることが不可能であるとされている。

- (24) A woman might be puzzled that her boyfriend views a two-hour session of mixed doubles on the tennis court as intimate time together, whereas he may have garnered a great deal of information about her from the experience.

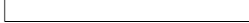

ここからも、話し手の認識に関わる要素の認可と聞き手を巻き込む対人要素の認可を区別する必要があることが示唆される。

以上の点を踏まえて、本稿では、Haegeman の分析を洗練することにより、「話し手」のムードに関わる要素と「聞き手」を巻き込む対人要素の認可条件を切り離すという可能性を、カートグラフィーの観点から示唆する。まず、Haegeman は、周辺的な副詞節が機能範疇 Force を持つと考えるが、(21)-(23) で見たように、Force が関わるタイプの中でも「断定」という発話の力はそれ以外の「命令」「疑問」といった発話の力とは、異なる振る舞いをする。そこで、以下に見るように、周辺的な副詞節の Force には、命令や疑問等の発話の力が、素性により個別に指定されていると考えよう。




この構造では、副詞節の最上位の階層として、Force が、while 等の接続表現の階層 SubP を選択している。ここで、ForceP の主要部 Force は、[疑問／命令／ ϕ] といった素性により、疑問や命令など対人に関わる発話の文タイプが個別に表示される。ここで ϕ とは、発話の力についての指定がなされていないことを示しており、デフォルトで「断定」と解釈されることを意味する。Force が [疑問／命令／ ϕ] という豊かな発話の力の素性指定を持つ場合、その副詞節は、疑問、命令、断定など特定の発話の力を持つことが可能となる。一方、Force が [ϕ] という素性指定を持つ場合、その副詞節は、デフォルトで、断定の発話の力を持つ。

この考えを念頭において、文頭に生じる周延的な副詞節には、なぜ疑問や命令といった特定の発話の力を持つ要素が生じないのかを考察しよう。Luigi Rizzi (私信) によれば、文頭に生じる周延的な副詞節と文末に生じる周延的な副詞節の違いは、その機能にあり、文末に生じる場合、周延的な副詞節は、主文と等位の関係で接続される (coordination) 機能を持つのに対して、文頭に生じる周延的な副詞節は、主文に対して従属 (subordination) の関係で接続される機能を持つ (cf. Verstraete 2007: 162)。この点は次のように表すことができる。

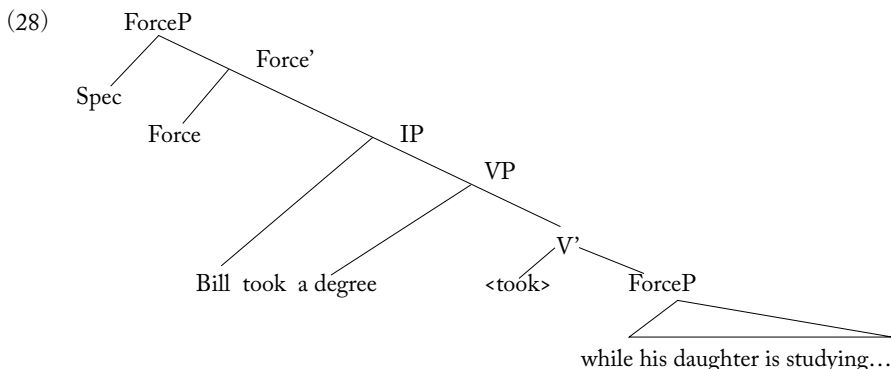
- (26) a. 主文 (等位) 周延的な副詞節

 b. 周延的な副詞節 (従属) 主文


本稿では、文頭に生じる副詞節が従属の機能のみを持つことから、文頭に従属を表す Subord (ination) という機能範疇が存在する可能性を示唆する。この従属を表す機能範疇 Subord は、(i) [疑問／命令／ ϕ] という豊かな素性指定を持つ ForceP を補部を選択し、(ii) その主要部は、[ϕ] という素性を持つと考える。すると、主要部 Subord は、その指定部にデフォルトで「断定」と解釈される [ϕ] の素性を持つ副詞節を牽引する²。

- (27) [SubordP 主文 副詞節 [ϕ]]


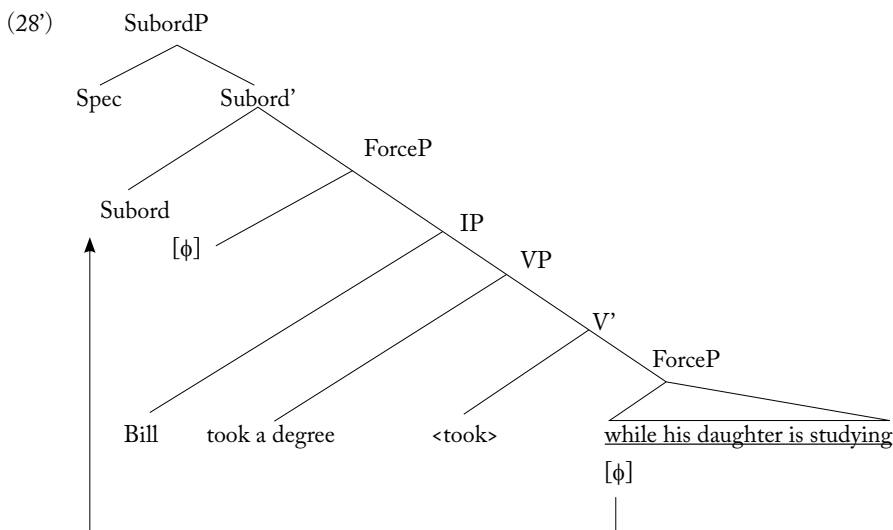
この考えによれば、文頭に生じる副詞節は、次の派生を持つ。まず、基底の構造を見よう。

² 第3節で見たように、Haegeman (2006) は、while など副詞節を導く接続表現の主要部として、Sub という機能範疇を想定し、それが Force よりの上も階層に属するとしている。本稿では、周延的な副詞節が移動される際の引金が、Force の素性によるとしているため、牽引される副詞節の最上位の階層に、ForceP を持つ構造を想定している。ちなみに、第2節で見たように、Rizzi (1997) は、peripheral field においては、ForceP が最上位の階層であることを示している。第2節で見たように、Haegem (2006) は、ForceP が Topic や Focus 等よりも低いポジションにある構造を想定しているが、その根拠は述べていない。



ここでは、文末に生じる while 以下の副詞節が動詞 took の補部に生じ、目的語は動詞句の指定部 Spec に生じている。(副詞的な要素が付加構造 (adjunction structure) を持たずに、構造的に低い補部のポジションに生じることが必要であることを示す独立した議論については、Pesetsky (1995) を参照。) また、この構造において、動詞が目的語に先行しているのは、Cinque (1999; sects 1.3-4) によれば、動詞が目的語より上のポジションに移動しているためである (斜め括弧の中の要素は移動要素の基底のポジションのコピーを表す)。この動詞や目的語の移動先の性質については、Johnson (1992) を参照。)

さて、従属の機能範疇 Subord の主要部には、 $[\phi]$ という素性の指定がなされており、主要部-指定部の一致により、その指定部には、次に見るように特定の発話の力が指定されていない (= $[\phi]$) デフォルトで「断定」と解釈される副詞節が牽引される。その結果、文頭に生じるのは、「断定」と解釈される副詞節のみとなる。



この文頭に生じる副詞節は、Subord の指定部のポジションで従属の解釈を付与され、その補部は主文／根源 (root) の解釈を付与される。つまり、機能範疇 Subord により、文頭に生じる周辺的な副詞節は、補部に生じる主文に対して、従属の関係を持つこととなる。

一方、文末に生じる副詞節は、従属の機能範疇 Subord が関与しないので、その主要部 Force は断定の解釈を受けるデフォルトの (= [φ]) の他に、命令、疑問といった豊かな発話の力が指定されることが可能である。その結果、その文末の副詞節には、命令、疑問、断定といった発話の力を持つことが可能となる。

次に、なぜ文頭に生じる周辺的な副詞節に、話し手のみが関与するムードの助動詞や副詞が生じることが可能であるのかを考察しよう。カートグラフィーにおいては、以下に見るムード表現の詳細な統語構造が Cinque (1999) により解明されている。Cinque によれば、様々なムードタイプの要素は、それを認可する一連の階層をなす機能範疇の主要部が inflectional field にあり、助動詞はその主要部で、副詞はその指定部のポジションで認可される。(時に誤解されるが、Guglielmo Cinque (私信) の指摘するように、これらの機能範疇の基底のポジションは、すべて inflectional field にある。その根拠に関しては、Paduan という言語に基づいた Cinque (2004: 701) の議論を参照。)

(29) MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative} > MoodP_{evidential} > ModP_{epistemic} > TP (Past) > TP (Future) ...

ここで一番上の階層にあるのは、話し手と聞き手の両方が関与する要素を認可する機能範疇 Mood (speech act) で、その下には、話し手の認識の関与する要素を認可する機能範疇 Mod (epistemic) がある。Haegeman は、speech-act の副詞が、Force に依存して認可される (anchor) としている。本稿では、この考えを洗練し、話し手と聞き手が関わる Mood (speech act) は、[疑問／命令／φ] という豊かな発話行為の指定を持つ Force に依存すると考える。すると、以下に見るように、文末の周辺的な副詞節には、inflectional field に、Mood (speech act) が生じ、それは、[疑問／命令／φ] という豊かな Force に依存することが可能となる。その結果、Mood (speech act) の指定部のポジションには、speech-act の副詞が生じることが可能となる。

(30) [Sub... [ForceP [疑問／命令／φ] [FinP [IP MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative}...
while | John frankly |

一方、文頭に生じる副詞節は、Subord の [φ] という豊かでない発話の力の素性により、その指定部に牽引されるため、牽引される副詞節も、次に見るように豊かでない [φ] という発話の力の Force を持つこととなる。

(30') [Sub... [ForceP [φ] [FinP [IP MoodP_{speech act} > MoodP_{evaluative}...
if | John frankly |

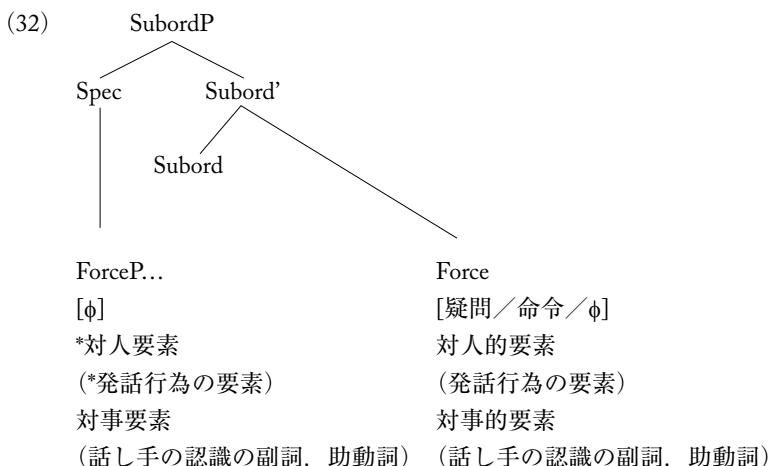
×

上で見たように、発話行為の副詞が生じる Mood (speech act) が依存できるのは、[疑問／命令／φ]という豊かな発話の力が指定されている Force であり、文頭に牽引された副詞節は、[φ]という豊かでない発話の力の指定を持つ。そのため、文頭に生じる副詞節の inflectional field に生じる Mood (speech act) は、認可されることがない。その結果、文頭に生じる副詞節には、speech-act により認可される発話行為の副詞 frankly などが生じることが不可能となる。

次に、話し手のムード要素を考察しよう。Cinque が示すように、話し手の関わる対事的な副詞は、発話行為に関わる Mood (speech act) とは異なる階層の Mod (epistemic) で認可される。この Mod (epistemic) は、発話の力とは関係がないので、Force の性質に依存することなく生じることが可能である。そのため、文頭に生じる副詞節の inflectional field にも、Mood (epistemic) は生じることが可能となる。その Mood (epistemic) の指定部のポジションでは、話し手のムード副詞 probably 等が認可され、その主要部のポジションでは、ムードの助動詞 may 等が認可される。その結果、文頭に生じる周辺的な副詞節には、話し手の認識に関わる副詞や助動詞が生じる事が可能となる。

- (31) [Sub... [FinP [IP MoodP_{speech act}>MoodP_{epistemic}...
 while John probably

以上をまとめると、次のようになる。



5. 付加疑問文と Force

次に、第2の問題である付加疑問文における局所性の問題を見よう。以下に関連する例を採録する。

- (9) a. Bill took a degree at Oxford while his children were still very young, *weren't they/didn't he?
 b. Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, isn't she?
 c. *Bill took a degree at Oxford, while his daughter is studying at UCL, didn't he?

Haegeman によれば、文末に生じる付加疑問文は、(9a) に見るように、それに先行する中核的な副詞節を超えて主節の要素と呼応することは可能であるが、中核的な副詞節の要素と呼応することは不可能である。一方、文末に生じる付加疑問文は、(9b) に見るように、周辺的な副詞節の要素と呼応することは可能である。ここでの問題は、文末に生じる付加疑問文が、なぜ、(9c) に見るように、周辺的な副詞節を超えて主文の要素と呼応することが不可能であるのか、という点である。

本稿では、この答えを局所性の原理に求める。この点を見るために、まず付加疑問文の派生を考察しよう。付加疑問文は、いわゆる yes/no 疑問文を文末に持つ形式で、(助) 動詞が CP の領域に生じる構造を持つ。Barbiers (2006: 102–103) や Den Dikken (2006: 729) は、この yes/no 疑問文において、CP 領域の指定部にゼロ演算子が生じるとしている。その根拠を見よう。次に見るオランダ語は、動詞が 2 番目のポジションを占める V2 の言語なのだが、(33a–b) に見る yes/no 疑問文においては、この V2 の制約は見られず、助動詞が 1 番目の文頭のポジションに生じている。Barbiers や Den Dikken は、yes/no 疑問文が、(21c) に見るように、文頭にゼロ演算子を持ち、助動詞が V2 のポジションを占めていると主張する。

- (33) a. Had hij gezegd dat hij zou vertrekken?
 had he said that he would leave
 b. Had hij gezegd dat hij zou vertrekken, ik zou teruggebeld hebben.
 Had he said that he would leave, I would back-called have
 'Had he told me he was leaving, I would have called him back.'
 c. [CP OP [_{Vfin} had] [TP Subject ... top]]

本稿では、この考えを付加疑問文に適用し、付加疑問文 (例えば, didn't he) の前には、ゼロ演算子が存在すると考える。さらに、このゼロ演算子は、付加疑問文において、呼応する節 (例えば, John kissed Mary) の Force の指定部に移動することにより、その付加疑問文が呼応する節のスコープをマークすると考える。つまり、付加疑問文のゼロ演算子が主文の ForceP の指定部に移動すると、主文と付加疑問文の間に連鎖が形成されることで、付加疑問文のスコープは主文に及ぶ。その結果、付加疑問文は主文の要素と呼応の関係を結ぶこととなる。一方、付加疑問文の演算子が周辺的な副詞節の ForceP の指定部に移動する場合、副詞節と付加疑問文の間に連鎖が形成されることで、付加疑問文のスコープは副詞節に及ぶ。その結果、付

加疑問文は副詞節の要素と呼応の関係を結ぶこととなる。この考えは、次のように表すことが出来る。

付加疑問文のスコープ

(34) [_{ForceP} John kissed Mary, [_{Op} didn't he?]



ここで形成される連鎖は、次の3つの要件が満たされた場合に合法的となる (Rizzi 2004)。

(35) (i) 同一性 (Identity), (ii) 卓立性 (Prominence), (iii) 局所性 (Locality)

(35i) は、連鎖の基底のポジションと移動先のポジションが同じ要素であることを求めるコピー理論の条件である；(35ii) は、連鎖の基底のポジションが移動先のポジションにc統御されることを求める構造的な条件である（ここで、AがBをc統御するのは、BがAの姉妹に含まれる場合と定義される。）；(35iii) は、連鎖の基底のポジションと移動先のポジションの間に同じタイプの要素が介在することを禁じる局所性の条件である。ここで、CがAとBの間に介在するのは、AとBがCを含まない最小の構造 (Minimal Configuration: MC) に生じる場合と定義される (cf. Rizzi 2004)。

(36) Y is in a Minimal Configuration (MC) with X iff there is no Z such that

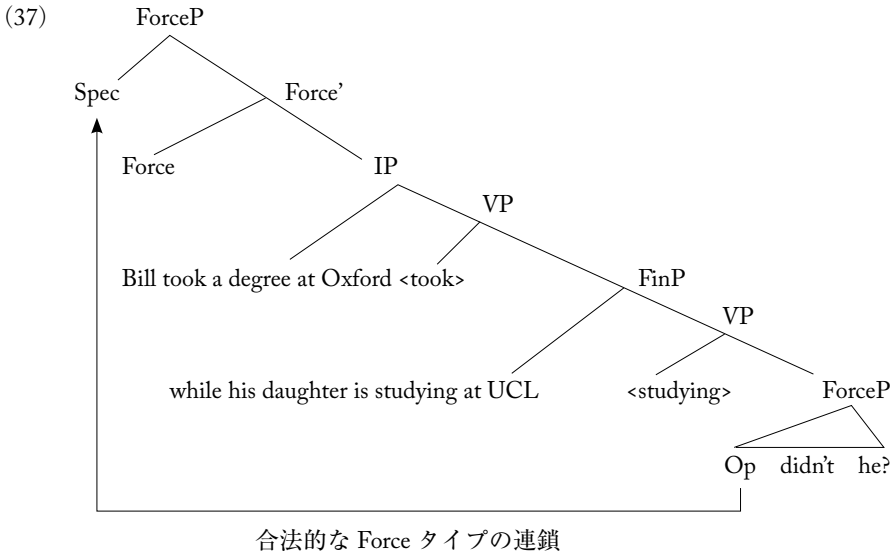
(i) Z is of the same structural type as X, and (ii) Z intervenes between X and Y.

この定義によると、連鎖の基底のポジションと移動先のポジションの間に、連鎖の基底のポジションをc統御するが、連鎖の先頭のポジションはc統御しないような同じタイプの要素が生じると、それは連鎖にとっての介在要素となり、その連鎖は非合法的となる。

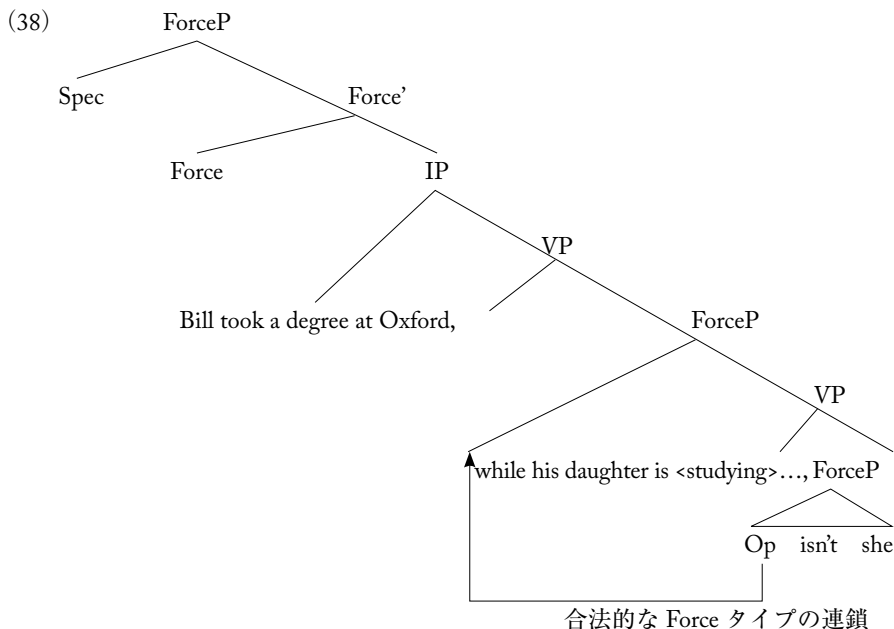
以上の考えを念頭において、付加疑問文の派生を見よう。まず、文末の付加疑問文の前に中核的な副詞節が生じる事例 (9a) を見よう。Haegeman に従い、中核的な副詞節は発話の力を持たないため、ForceP を持たない FinP の構造を持つと考えよう³。さらに、Kayne (1994) や Cinque (1999) に従い、統語的な付加操作 (adjunction

³ ここで、中核的な副詞節に対して FinP の統語表示が想定される理由を見よう。第2節で見たように、peripheral field には、Force > Topic > Focus > ... > Finiteness という階層構造が存在する。Rizzi (1997) によれば、この Fin と Force の間にある Topic や Focus といった談話やスコープに関わるポジションは、トピックやフォーカス等の要素が生じない場合には活性化されず、peripheral field は、Force と Fin の融合した (syncretic) 構造を持つ。一方、トピックやフォーカスといった談話やスコープに関わる要素が生じる場合、Force と Fin の間の領域が活性化され、peripheral field は Topic や Focus の機能範疇を含む Force > Topic > Focus > ... > Finiteness といった分析的な (analytic) 構造を持つ。この考えによれば、トピックやフォーカスといった談話要素も Force も持たない中核的な副詞節の構造は、(37) に見るような FinP の構造を持つこととなる。

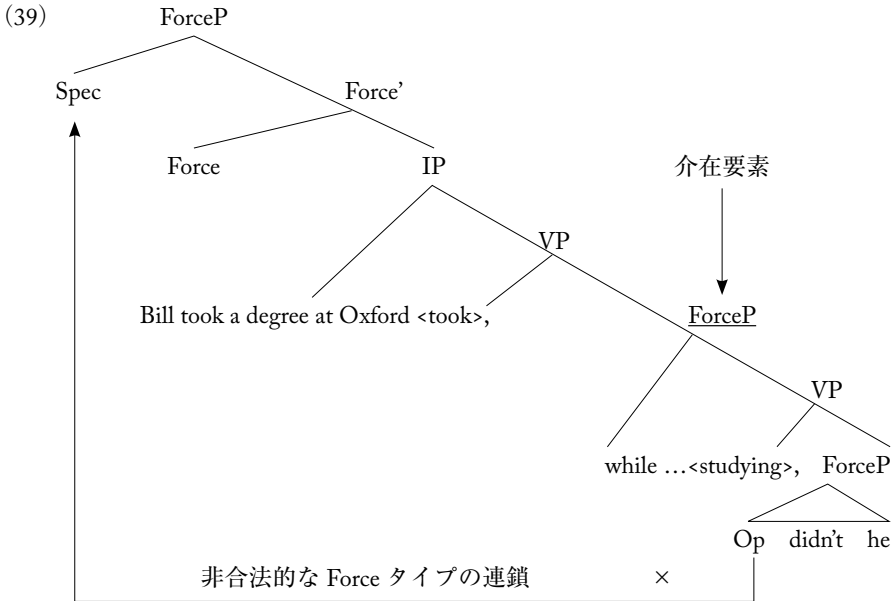
structure) のない制限の強い構造を想定しよう。すると、文末の付加疑問文は、構造的に、それに先行する要素よりも低いポジションに生成され、そのポジションからゼロ演算子が移動する。下の構造に見るように、ゼロ演算子が主文に移動した場合、付加疑問文は、主文にスコープをとる Force タイプの連鎖が形成される。この連鎖は、合法的である。というのも、その連鎖の間にある中核的な副詞節は Force をもたない FinP であるため、Force タイプの連鎖にとっての介在要素とはならないからである。この結果、文末に生じる付加疑問文は、主文をスコープにとり、主文の要素と呼応する (9a) に見る呼応関係が生じる。



次に、文末の付加疑問文の前に周辺的な副詞節が生じる事例 (9b) を見よう。前節でも見たように、周辺的な副詞節は独立した発話の力を持つことから、Haegeman に従い、ForceP を持つと考えよう。この場合、付加疑問文の演算子は、以下に見るように、一番近い周辺的な副詞節の ForceP の指定部をターゲットにして移動する。これにより、付加疑問文は、副詞節にスコープを持つ Force タイプの連鎖を形成する。この Force タイプの連鎖には、同じ Force タイプの要素が介在しないため、合法的な連鎖となる。その結果、付加疑問文のスコープは、その前に生じる周辺的な副詞節に及び、付加疑問文はその副詞節の要素との間に呼応関係が成立することが可能となる。



最後に、文末の付加疑問文が周辺の副詞節を超えて主文の要素と呼応することにより非文法性が生じる事例 (9c) を見よう。(9b) と同様に、周辺の副詞節は独自の発話の力を持つため、ForceP を持つと考えよう。付加疑問文が主文の要素と呼応する場合、次に見るように文末に生じる付加疑問文から、ゼロ演算子が主文の Force の指定部をターゲットにして移動する。これにより、付加疑問文と主文との間に、Force タイプの連鎖が形成され、付加疑問文が主文にスコープをとる。しかし、この Force タイプの連鎖には、次に見るように同じタイプである周辺の副詞節の ForceP が介在するので、連鎖に課される局所性の違反が生じ、この連鎖は非合法的となる。その結果、文末の付加疑問文は、周辺の副詞節を超えて主文の要素との間に呼応の関係を持つことが不可能となる。



以上をまとめると、従属度の異なる副詞節が付加疑問文に関して異なる局所性の効果を示す事実に対して、カートグラフィーの観点から説明を試みた。そこでは、Haegeman の分析を、Rizzi (2004) の提案する連鎖に課される局所性の性質を用いて洗練し、付加疑問文において選択的に生じる局所性の効果を説明する可能性を示唆した。

6. 結語

本稿では、英語の副詞節を、カートグラフィーの観点から考察した。具体的には、日本語学の研究により解明された文の従属度の概念を出発点にして、英語の周辺的な副詞節が1種類であるという Haegeman (2006) の考えを洗練し、英語には2種類の周辺的な副詞節があることを示唆した。特に、「文末」に生じる周辺的な副詞節には、「話し手」のみが関わる対事的なムード要素も「聞き手」を巻き込む対人的なムード要素も生じることが可能であるのに対して、「文頭」に生じる周辺的な副詞節には、「聞き手」を巻き込む対人的な要素が生じない事実を考察した。この事実を説明するために、話し手のムードが関与する要素の認可条件を聞き手を巻き込む対人的なムード要素の認可条件から切り離すアプローチをカートグラフィーの観点から提示した。その際に、副詞節の従属関係を意味する機能範疇 Subord の存在を示唆した。(話し手と聞き手の認可条件を切り離す必要がある点については、日本語の終助詞に関して、遠藤(近刊)でも議論がなされている。)

最後に、査読者の一人が指摘する問題を考察しよう。もし、本稿のアプローチの

ように、付加構造 (adjunction structure) を許さない統語構造を仮定すると、補文に後続する副詞が主文を修飾する次のような事例は、どのように説明されるのであろうか。

(40) John believed Mary to be a genius until yesterday.

ここで提示されている問いは、付加構造を持たない制限の強い統語構造を想定する場合に生じる一般的な性質のもので、Kayne (2000: 241) において詳細に論じられている。Kayne によれば、(41a) に見る文末に生じる否定の副詞的要素 not a single linguistic book が主文をスコープに持つ事例は、次のように説明される。まず、この文は、(41b) に見るように、否定の副詞要素 not a single linguistic book が主文の否定句 (NegP) の指定部に移動し、そのポジションで主文のスコープが付与される。次に、requested 以下の要素が、主文の NegP よりも高いポジションに移動する。最後に、John has が、その構造に併合され、(41c) に見るように (41a) の文が生じる。

- (41) a. John has requested that they read not a single linguistics book.
 b. ...requested that they read not a single ling. book →
 [NegP not a single ling. book [VP requested that they read →
 [VP requested that they read [NegP not a single ling. book →
 c. John has [VP requested that they read [NegP not a single ling. book

この考えを念頭において、(40) の事例を考察しよう。第2節で見たように、文頭の peripheral field には、副詞的要素が文頭に移動された場合にターゲットとなるポジション (ModP) がある。すると、(40) の事例は、以下の (42) に見るように派生される。まず、(42b) に見るように、補文の文末に生じる副詞要素 until yesterday が主文の ModP の指定部に移動し、そこで主文のスコープが付与される。次に、(42c) に見るように、John 以下の要素が、それよりも高いポジションに移動する。

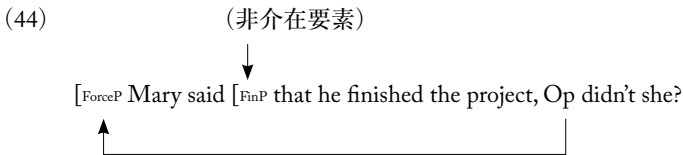
- (42) a. John believed Mary to be a genius until yesterday.
 b. [ModP until yesterday [IP John believed Mary to be a genius →
 c. [IP John believed Mary to be a genius [ModP until yesterday...

また、これとの関連で、査読者の一人が指摘する次の事例を考察しよう。ここで、補文に後続する付加疑問文が、主文の要素と呼応している。

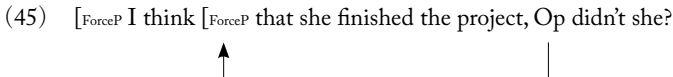
(43) Mary said that Bill finished the project, didn't she?

Lakoff (1969) によれば、文末の付加疑問文が、補文の要素と呼応するか主文の要素と呼応するかは、主文の述語の性質により決定される。つまり、主文の述語が、suppose, imagine, think, believe 等の、否定上昇変形 (Negative Raising) が可能な場合、文末の付加疑問文は、補文の要素と呼応することが可能となる。そして、それ以外の場合には、文末の付加疑問文は主文と呼応する。(Lakoff のこの考えに洗練

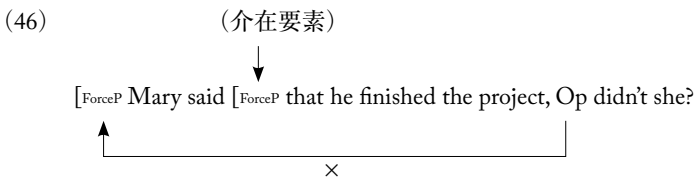
が必要であるという議論については、Cattell (1973) を参照。また、英語の付加疑問文における従来の研究の論点のまとめに関しては、McCawley (1988: 479-500) を参照。) 本稿のアプローチでは、(43)に見る補文に後続する文末の付加疑問文が主文の要素と呼応が可能であるのは、次に見るように、補文が ForceP を持たない (= FinP) ためと言える。つまり、文末の付加疑問文から移動するゼロ演算子は、典型的には、局所性の原理により一番近い補文の ForceP の指定部をターゲットにして Force タイプの連鎖を形成する。しかし、補文が ForceP を持たない FinP を持つ以下に見る構造においては、FinP は Force 連鎖とは異なるタイプである。そのため、文末の付加疑問文のゼロ演算子は、主文の ForceP の指定部をターゲットに移動して、Force タイプの合法的な連鎖が形成される。その結果、文末の付加疑問文のスコープは主文に及び、文末の付加疑問文は主文の要素と呼応することとなる。



一方、文末の付加疑問文が補文の要素と呼応するのは、補文が ForceP を持つ場合と言える。つまり、文末の付加疑問文から移動するゼロ演算子は、局所性の原理により、一番近い補文の ForceP の指定部をターゲットに移動し、Force タイプの連鎖を形成する。この結果、文末に生じる付加疑問文は補文をスコープに持ち、補文内の要素と呼応の関係を持つこととなる。



一方、この ForceP を補文に持つ構造で、文末の付加疑問文から移動するゼロ演算子が主文の Force をターゲットにして移動が生じると、次に見るように Force タイプの連鎖の中に、同じタイプの Force 要素が介在するため、局所性の違反が生じる。その結果、この連鎖は非合法的となり、文末に生じる付加疑問文は、主文をスコープに持つことはなく、主文の要素と呼応することは不可能となる。



本稿のアプローチによれば、文末の付加疑問文が補文の要素とも主文の要素とも呼応が可能な場合は、主文の述語が随意的 (optional) に、補文に ForceP と FinP を選択していると言える。

参 照 文 献

- Aboh, Enoch (2004) *The morphosyntax of complement-head sequences*. New York: Oxford University Press.
- Baker, Mark (1985) The mirror principle and morphosyntactic explanation. *Linguistic Inquiry* 16: 373–415.
- Barbiers, Sjef (2006) The syntax of modal auxiliaries. In: Martin Everaert and Henk van Riemsdijk (eds.) *The Blackwell companion to syntax*. Vol V. 1–22, Chapter 70. Oxford and Boston: Blackwell.
- Bocci, Giuliano (2009) On syntax and prosody in Italian. Doctoral dissertation, University of Siena.
- Cattell, Ray (1973) Negative transposition and tag questions. *Language* 49: 612–639.
- Chomsky, Noam (1995) *The minimalist program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and functional heads*. Oxford: Oxford University Press.
- Cinque, Guglielmo (2004) Issues in adverbial syntax. *Lingua* 114: 683–710.
- Coniglio, Marco (2009) Die Syntax der deutschen Modalpartikeln: ihre Distribution und Lizenzierung in Haupt- und Nebensätzen. Doctoral dissertation, Università Ca' Foscari Venezia/Humboldt-Universität zu Berlin.
- Den Dikken, Marcel (2006) Either float and the syntax of co-ordination. *Natural Language and Linguistic Theory* 24: 689–749.
- Endo, Yoshio (2006) The cartography of Japanese syntactic structures. Doctoral dissertation, University of Geneva.
- Endo, Yoshio (2007) *Locality and information structure: A cartographic approach to Japanese*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- 遠藤喜雄 (2009a) 「トピックのカートグラフィー」『日本語学』28(4): 50–59.
- 遠藤喜雄 (2009b) 「主文と複文のカートグラフィー」第81回日本英文学会(全国大会)招待研究発表。 *The Proceedings of the 81th General Meeting of the English Literary Society of Japan* に掲載予定。
- 遠藤喜雄 (近刊) 「終助詞のカートグラフィー」長谷川信子(編)『日本語研究と言語理論—命題を超えて—』東京: 開拓社出版。
- 藤田耕司・松本マサミ (2005) 『語彙範疇(1) 動詞』東京: 研究社出版。
- Haegeman, Liliane (2006) Argument fronting in English, Romance CLLD and the left periphery. In: Rafaella Zanuttini, Hector Campos, Elena Herburger and Paul Portner (eds.) *Negation, tense and clausal architecture: Cross-linguistic investigations*, 27–52. Georgetown: Georgetown University Press.
- Hale, Ken and Samuel Jay Keyser (2002) *Prolegomenon to a theory of argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- 庵功雄 (2001) 『新しい日本語学入門』東京: スリーエーネットワーク。
- Johnson, Kyle (1992) Object positions. *Natural Language and Linguistic Theory* 9: 577–636.
- 金子義明・遠藤喜雄 (2001) 『機能範疇』東京: 研究社出版。
- Kayne, Richard (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Kayne, Richard (2000) *Parameters and universals*. Oxford & New York: Oxford University Press.
- Kiss, Katalin É. (1998) Identificational focus versus information focus. *Language* 74: 245–268.
- 久野すすむ (1987) 『談話の文法』東京: 大修館書店。
- Kuno, Susumu and Ken-ichi Takami (1993) *Grammar and discourse principles: Functional syntax and GB theory*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Woman, fire, and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, Robin (1969) A syntactic argument for negative transportation. *CLS* 5: 140–147.
- McCawley, James (1988) *The syntactic phenomena of English*. Chicago: University of Chicago Press.
- 南不二男 (1974) 『日本語の構造』東京: 大修館書店。
- 野田尚史 (1989) 「文構成」宮地裕(編)『日本語の文法』第1巻: 49–66。東京: 明治書院。
- Pesetsky, David (1995) *Zero syntax: Experiencers and cascades*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Rizzi, Luigi (1997) The fine structure of the left periphery. In: Liliane Haegeman (ed.) *Elements of grammar*, 281–337. Dordrecht: Kluwer.
- Rizzi, Luigi (2004) Locality and left periphery. In: Adriana Belletti (ed.) *Structures and beyond: The cartography of syntactic structures*, 223–252. Oxford: Oxford University Press.

- Rizzi, Luigi (2009) The cartography of syntactic structures: Locality and freezing effects on movement. 日本言語学会第138回大会（神田外語大学）における公開シンポジウムの発表論文.
- Verstraete, Jean-Christophe (2002) Interpersonal grammar and clause combining in English. Doctoral dissertation, University of Leuven.
- Verstraete, Jean-Christophe (2007) *Rethinking the coordinate-subordinate dichotomy: Interpersonal grammar and the analysis of adverbial clauses in English*. Berlin: Mouton de Gruyter.

執筆者連絡先：

261-0014 千葉県美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学大学院言語科学研究科

[受領日 2009年1月30日

最終原稿受理日 2009年8月16日]

Abstract

The Cartography of the Speaker and the Addressee

YOSHIO ENDO

Kanda University of International Studies

This paper explores some syntactic properties of the CP zone with special attention to various types of adverbial clauses in English within the framework of the cartography of syntactic structures, initiated by Luigi Rizzi and Guglielmo Cinque (cf. Cinque 1999; Rizzi 1997, 2004). A refinement of Haegeman's (2004) analysis of adverbial clauses is proposed, where those mood related elements that involve the speaker and the addressee should be licensed by different functional heads. It is also shown that some traditional descriptive Japanese grammarians' insight into the degree of subordination sheds some new light on the nature of English adverbial clauses in English.